

ライティング支援の運営体制を構築する上での工夫とその効果

—立ち上げ期 2 年間の利用データ分析を通して—

小林至道*, 中竹真依子*, 増田翔太**, 松原栄子**, 吉澤哲平**, 遠藤玲奈**, 平尾 空***

*青山学院大学アカデミックライティングセンター

**青山学院大学大学院文学研究科

***青山学院大学大学院経営学研究科

本発表の目的と意義

本発表は、青山学院大学アカデミックライティングセンターが、個別相談によるライティング支援を開始してから2年間のデータを比較検討することによって、これまで施策してきたライティングセンター運営上の工夫とその効果について、実証的に明らかにすることを目的とする。

近年、学生に対する新たな教育的実践として、レポート・論文のライティングプロセスを正課授業内だけではなく、授業外の機関においてサポートする動きが広まりつつある。その機関名称こそさまざまであるが、具体的には、ライティングセンターを新設する、あるいは、大学図書館の一角にライティングサポートデスクを設置する大学が複数見られ、本学もその一例として挙げられる。

授業外においてライティング支援を組織的に実践する上での現状と課題については、これまで佐渡島(2009)の論考を皮切りに、各大学の具体的な実践事例の検討を通して明らかにされてきている【1】。しかし、そうした先行事例を参考に、組織的なライティング支援機関を立ち上げ、その運営を担う立場に身を置いてみると、どのような仕組みで組織を構築し、どのように運営を展開していけばよいのかよくわからず、イメージができないという極めて現実的な問題に直面する【2】。

そこで本発表では、ライティングセンターを運営する立場から、学生の書く力の向上という目的のもと、どのような点で創意工夫を凝らし、どのようなデータに着目しながら、ライティングセンターを形にしてきているのか、できる限り裏づけとなるデータを開示して、実証的に明らかにすることをめざす。本発表は、現在、ライティング支援の組織的運営を担う立場にある方々、これからそうした組織を立ち上げ、運営を担っていく立場にある方々に対して、とくに意義のある知見を発信できるのではないかと考えられる。

方法

本発表では、本学ライティングセンターで個別相談によるライティング支援を開始した2017年11月から2019年11月までの2年間のデータを分析対象とする。分析に用いる変数は、利用者の所属(学科・研究科別)、学年、相談日時、相談文章タイプ、利用回数、予約時の進行状況、相談文章の事前提出の有無、利用動機、課題提出日までの残り日数、相談/支援内容、利用者満足度である。

ライティングセンターとして、個別相談の質を保証しつつ、「いかに全学の学生に広く利用されるようにするか」、「いかに書くプロセスで繰り返し利用されるようにするか」の2点を、立ち上げ期における運営上の課題としてきた。その課題を解決するため、この2年間に施してきた運営上の工夫の成果が、利用データ上でどのように表れているのか、という点が本発表の分析課題である。

結果と考察

ライティングセンターを運営する上で、個別相談の質を保証する仕組みの構築、全学的な利用の促進、書くプロセスでの繰り返しの利用を促すために施してきたさまざまな工夫の成果は、学生の所属学科・研究科別の利用件数、相談文章の事前提出率、レポート・論文を書くプロセスでの利用のされ方、利用者満足度、の各数値においてデータとして表れていることが明らかになった。

参考文献

【1】佐渡島紗織(2009)「自立した書き手を育てる - 対話による書き直し -」『国語科教育』66巻, 全国国語教育学会, pp.11-18.

【2】増地ひとみ(2019)「日本語ライティング支援に携わる学部生チューターの研修 - 「教える」と「考えさせる」を区別するマトリクスの提案 -」『リメディアル教育研究』第13巻, pp.1-12.